

湿地の概要

涸沼は茨城県の太平洋岸、大洗海岸から5kmほど内陸にある湖で、銚田市、茨城町、大洗町の3市町にまたがる関東地方唯一の汽水湖です。

約6,000年前には海の入江だったが、気温が下がるにつれ海面が後退し、さらには那珂川の自然堤防によって下流に土砂が堆積し、涸沼川の下流が海と切り離されてできた海跡湖で、面積935ha、平均水深2.1m、最大水深約6.5mの東西に細長い形をしています。

湿地にかかわる動植物

涸沼では、場所によって塩分濃度が異なるため、汽水性、海水性、淡水性のさまざまな生物が生息しています。

涸沼では、これまでの調査で、88種以上の鳥類が確認されています。冬にはマガモ、スズガモなどのカモ類が多く越冬し、特にスズガモは、東南アジア地域個体群の個体数の1%を超える5,000羽程度が毎年飛来し、渡り鳥の越冬地として重要な区域となっています。

特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約（ラムサール条約）

ラムサール条約は1971年2月2日にイランのラムサールという都市で開催された国際会議で採択された、湿地に関する条約です。正式名称は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といいますが、採択の地にちなみ、一般に「ラムサール条約」と呼ばれています。



条約の目的である湿地の「保全・再生」と「賢明な利用（ワイズユース）」、これらを促進する「交流・学習（CEPA）」。これら3つが条約の基盤となる考え方で。

ラムサール条約と条約湿地HPのご案内



<https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/index.html>

涸沼の登録基準

基準2：絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地

基準4：動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている湿地。または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地

基準6：水鳥の1種または1亜種の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地

涸沼水鳥・湿地センター

開館情報

Opening Information

開館時間

9:00 ~ 16:30

入館料

無料

休館日

毎週月曜日

(祝日、振替休日の場合は翌日)・年末年始

国指定涸沼鳥獣保護区

鳥獣保護区
2,072ha

特別保護地区
(ラムサール条約指定範囲)
935ha

指定区分/集団渡来地の保護区
存続期間/平成26年11月1日から
令和16年10月31日迄



展示施設



観察棟

展示施設 〒311-3125 茨城県茨城町下石崎 2585 番 4

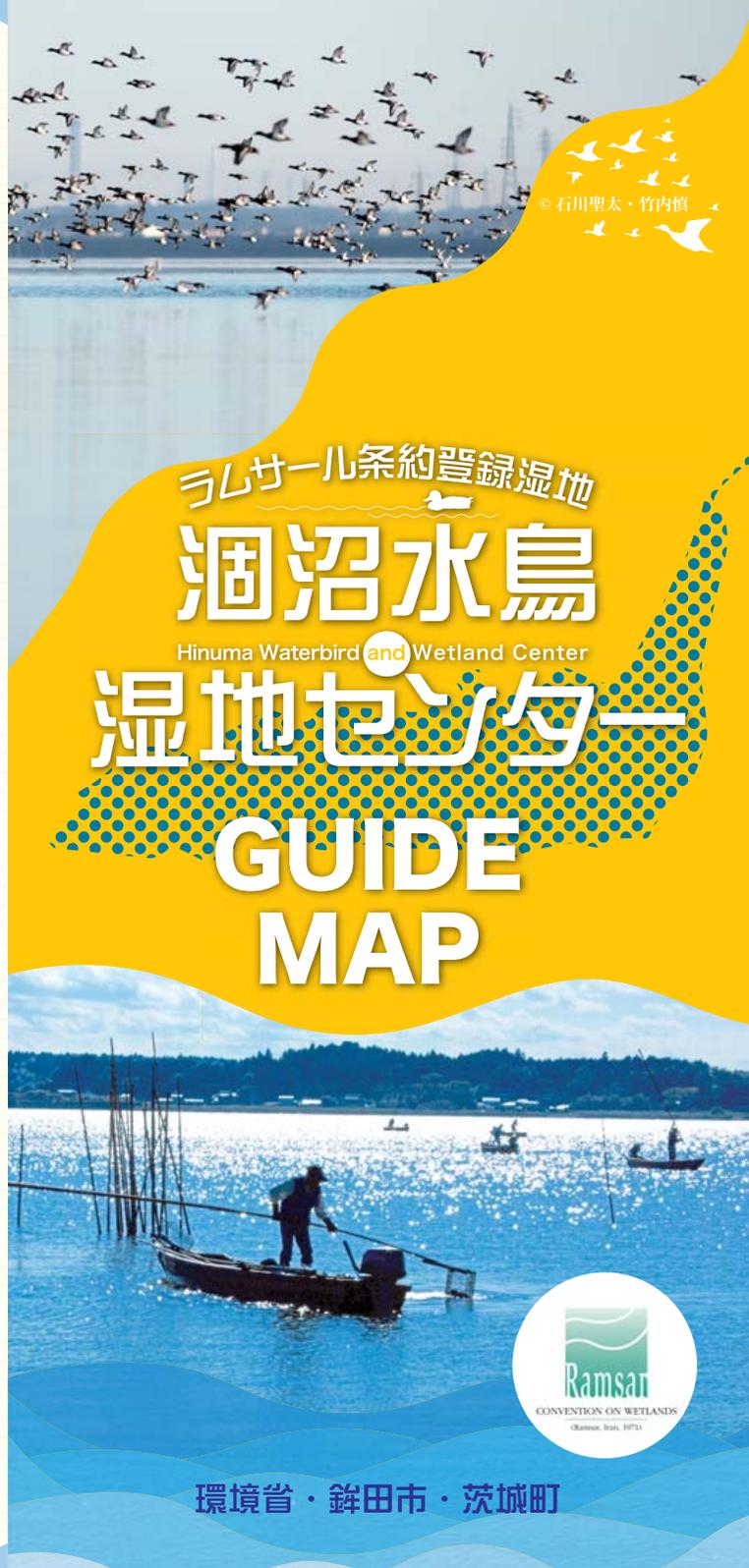
アクセス：北関東自動車道 茨城町東 IC または水戸南 IC から車で 16 分
お問い合わせ：茨城町生活経済部みどり環境課 ☎029-240-7135

観察棟 〒311-1401 茨城県銚田市箕輪 1754 番

アクセス：電車 鹿島臨海鉄道大洗鹿島線涸沼駅より徒歩 11 分
車 北関東自動車道水戸大洗 IC から車で 20 分
お問い合わせ：銚田市環境経済部生活環境課 ☎0291-36-7486

ひぬまの会
HPのご案内

銚田市、茨城町、大洗町周辺地域の観光や地域振興を図るため、関係団体等の代表者で構成される「ラムサール条約登録湿地ひぬまの会」では、周辺地域の観光や地域振興に加え、各団体の皆様とも連携をしながら、様々な活動を行っています。詳しくはHPをご覧ください。



© 石川聖太・竹内慎

ラムサール条約登録湿地
涸沼水鳥
Hinuma Waterbird and Wetland Center
湿地センター
GUIDE
MAP

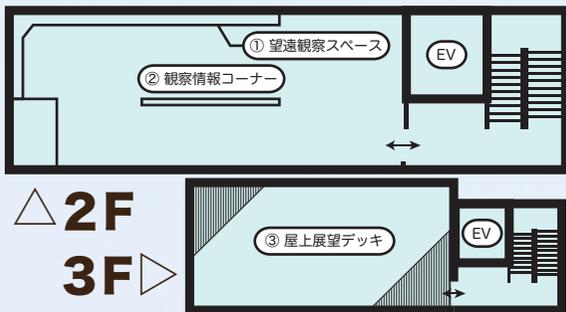


環境省・銚田市・茨城町

涸沼水鳥・湿地センター
鈴の音テラス
銚田市（観察棟）

目の前にはヨシ原が広がり、冬季にはスズガモを始め多くの鳥類が湖面で羽を休めています。また、涸沼の漁師さんが漁を行う様子も見る事ができます。2階には望遠鏡を設置しており、手ぶらでも野鳥観察が楽しめます。また、ここを拠点にして涸沼周辺の野鳥観察ができるよう情報コーナーを設けており、今見られる野鳥の情報交換の場としての機能も有しています。

屋上からは涸沼の眺望が楽しめます。西には筑波山が位置し夕暮れには筑波山と夕焼けが織りなす美しい景観を見ることができます。



10基のフィールドスコープを設置しており、手ぶらでも野鳥観察ができます。



涸沼で見られる野鳥の紹介や、今見られる野鳥の情報交換の場としてご利用ください。



涸沼の景色がパノラマで広がります。対岸には展示施設も見ることができます。

この二つの施設から地域と共にラムサール条約の理念を
紡いでいく



涸沼水鳥・湿地センター
茨城町（展示施設）

ラムサール条約登録湿地涸沼の歴史や汽水湖の環境、水鳥、魚類、昆虫、植物など豊かな生態系について紹介する展示コーナーと多様な保全活動や学習の拠点として利用できるレクチャールームの機能を有する施設です。特に展示コーナーのミニ水族館では涸沼の水生物の生態展示を行っており生物の様子をじっくりと観察することができます。また、伝統のシジミ漁の体験コーナーもあり自然と産業の関わりを学べます。

南側にはデッキフロアを設けており、シンボルツリーと涸沼の湖面が広がる景観を見ながら汽水湖ならではの潮風を受けてのんびりとした時間を過ごすことができます。



会議やワークショップなど活動の拠点として利用できます。



シンボルツリーと涸沼の湖面が一望できます。サイクリングロードとも面しており景色を見ながら小休憩をとることもできます。



涸沼について自然や人との関わりなど様々な解説をしています。ラムサール条約としての涸沼について学習することができます。

ラムサール条約登録基準の鳥たち



【スズガモ】

カモ科 全長40～51cm

涸沼に最も飛来する海ガモ類で冬鳥として日本に飛来し、海水域を好む傾向があります。水に潜ってシジミなど貝類を食べます。かつてはスズガモの群れの位置を頼りにシジミ漁を行っていたそうです。

スズガモの名前の由来は飛翔時に羽音が金属的で鈴の音に似ていることからきています。野鳥観察棟の「鈴の音テラス」の名称もこの羽音に由来します。

【オオセッカ】

センニュウ科 全長約13cm

留鳥又は漂鳥として青森県、茨城県、千葉県などの広いヨシ原で局地的に繁殖します。ヨシの高さが2mを超えるような場所を好み主に昆虫類を捕食します。

涸沼では、個体数は少ないですが春～夏に見ることができます。環境省及び茨城県レッドデータブックで絶滅危惧IB類に選定されています。



【オオワシ】

タカ科 全長88～102cm

白・黒・黄色のコントラストが美しい巨大なワシで羽を広げると2mを超え飛ぶ姿は壮大です。日本には冬鳥として主に北海道に飛来し少数が本州各地の湖沼、河口などで越冬します。主に魚類を捕食しますが、時にはカモなどの鳥類も捕食します。

環境省レッドデータブックでは絶滅危惧II類、茨城県では絶滅危惧IB類に選定されています。



トビツグ

【ヒヌマイトトンボ】

イトトンボ科 体長29～34mm

涸沼で発見されたことからこの名前が付けられました。汽水湖のヨシ原で生息し6～8月に成虫を見ることができます。メスはオレンジ色で良く似た種類も多く、見分けにくいですが、オスは胸に4つの緑色の斑文があり、他のイトトンボには見られない特徴となっています。環境省レッドデータブックでは絶滅危惧IB、茨城県では絶滅危惧IA類に指定されています。

